瀬田の丘

創刊 1973 年
編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

今日のみことば
三位一体の主日　A 年（2023 年 6 月 4 日）

瀬田教会主任司祭　小西広志神父

第一朗読：出エジプト記　34 章 4b ― 6、8 ― 9 節
第二朗読：コリントの信徒への手紙 2　13 章 11 ― 13 節
福音朗読：ヨハネによる福音書　3 章 16 ― 18 節

独り子をお与えになった意味

福音朗読は、ニコデモとの対話の箇所です。直前に「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければならない。それは、信じる者がみな、人の子によって永遠の命を得るためである」（14-15 節 フランシスコ会訳）とあります。それを受けて今日の朗読箇所があります。

「モーセが荒れ野で蛇を上げた」のは、イスラエルの民がエジプトから救い出された後、40 年間荒れ野を旅した物語の中に出てくる出来事（民数記 21 章 4-9 節）でした。

14 節と 15 節は「人の子」であるイエスさまの側から見た救いのためのわざと、その目的を表しています。それに対して 16 節からは神（御父）の側から見た救いのためのわざとその目的が表現されます。

三つの朗読のあじわい

第一朗読：神はご自分のことをあからさまに教えてくれる

神ご自身が「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ちた者」であると自分のことをあからさまにしてくれた（啓示）。神は把握しきれない神秘ではなく、人間に自分のことを自己開示してくれる、そんな神。

第二朗読：次第次第にわかってくる神の姿

神は、人間の能力、程度に合わせて次第に次第にご自分のことを明らかにしてくださる。いっぺんには自己開示しない。その意味では神秘。第二朗読では、愛の神、平和の神、共にいる神、交わりの神といった具合に分かってきた。このきっかけは、主イエス・キリストの出来事です。

福音朗読：送り出す側と送り出される側

世を救うために送り出されたという自覚がイエスの中にあった。送り出されても交わりは失われない。いや、送り出されたからこそ、交わりは深まる。

わたしたちの人生に照らして考えてみましょう。

第一朗読と第二朗読に従えば、神さまがどんな方であるかは、少しずつ人生の中で明らかになっていきます。だから、「わたしは神さまを知ってます」とは言い切れないでしょう。いつも胸をたたいて、「神さま、あなたのことを教えてください」と謙虚に願わなければならないのです。

しかし、第二朗読にあるように、神さまは交わり（コイノーニアー）の神さまです。神さまのいのちの内側で父と子と聖霊の愛の交わりがあるからです。その交わりはいのちの外側へ、つまり、わたしたちの日常へとあふれ出ます。交わりの神さまは、わたしたち一人ひとりと交わりたいと思っておられるのです。

福音朗読から見えてくるのは父なる神さまと、独り子であるイエスさまとの関係です。送り出す、送り出される関係は、信頼と理解がなければ成り立ちません。わたしたちは人生のいろいろな場面で送り出し、送り出されてきました。どんな気持ちだったのでしょうか。父なる神さまが独り子を送り出す、派遣するときの気持ちを少しでも察することができるでしょう。